

## 土木偉人をたずねて、新しきを知る

シビルNPO 連携プラットフォーム 理事  
土木学会土木広報センター センター長

早稲田大学名誉教授 依田 照彦



土木学会の大きなイベントとして、土木学会全国大会が毎年開催されている。平成 30 年度は、8 月 29 日から 31 日までの 3 日間、北海道大学で開催された。その中で、土木学会の土木広報センターからの企画として、「ベスト・イノベーター・オブ・土木偉人」が全国大会初日の午後、開催された。この企画は、明治 150 年企画と連動した企画であり、明治期に革新的な功績を残した土木偉人を取り上げ、学生および若手技術者に土木偉人についてプレゼンテーションを行っていただき、来場者の投票により、ベストプレゼンターを選ぶという企画である。その背景には、最近土木学会から発行された「土木偉人かるた」の存在がある。「土木偉人かるた」は、社会革新の原動力となった土木偉人たちをテーマに、土木が人と自然に関わってきた歴史的役割や価値を知る・学ぶ・楽しむツールとして制作されたものである。プレゼンテーション対象の土木偉人は、かるたに収録されている 48 人に限定されておらず明治期の土木偉人を取り上げていた。発表者は土木偉人の魅力を、a)革新性、b)実行力、c)現在への継承という 3 つのポイントに注目して発表を行っていた。

当日は、本企画の中心人物である緒方英樹氏が総合司会を担当し、プレゼンテーションの進行を中野朱美氏が、そして「土木偉人かるた」の紹介を鈴木三馨氏が担当された。さらに、土木広報センターからは、小松 淳氏、佐藤雅泰氏、前田利光氏、小林秀行氏が全体の運営にかかわっておられた。

9 名の発表者により、9 名の土木偉人が話題提供された。9 名は発表順に、濱口 梧陵、バルトン、田辺 朔郎、井上 勝、青山 士、田中 豊、高田 雪太郎、岡崎 文吉、廣井 勇の土木偉人である。9 名の発表をすべて拝聴して、「温故知新」の言葉がすぐに頭に浮かんだ。明治期の土木偉人が残した技術や思想は、現在でもびっくりするくらい新しいのである。明治 150 年で日本が変われたのは、まさにこのような土木偉人の「先見の明」のお陰なのである。発表していた若い学生や技術者の様子を見てみると、今後の 150 年を担ってくれる頼もしい姿が感じ取れた。今後も土木偉人がどんどん出るのではないかと確信を持った次第である。教育に長い間携わってきた身として至福の時であった。

発表者には全員プレゼン賞（認定証）と記念品が授与された。全員すばらしい発表であると確信したが、投票により 2 名の学生がベストプレゼンターに選ばれた。選ばれる者とそうでない者が出ることは企画の趣旨からすれば、当然のことなのであるが、土木分野の特徴を垣間見た気がした。

すべての土木関係者が土木偉人として 150 年後に名を残すことはないだろうが、われわれはみな、土木偉人を生み出すことはできるし、土木偉人を支えることもできる。わが国の有史以来の土木の営みを振り返ると、土木偉人を支えた名前が残らない土木偉人が大勢いたように思う。そのような人々こそ真の土木偉人かもしれない。土木のインフラを支えるには、表舞台に立つか、裏方で頑張るかの違いはあっても、土木偉人の存在が欠かせないように思う。